東アジアの古典芸能の現在

かつての東アジアとの文化交流は、日本の古典芸能へ多分に影響を与えた。その後、各国の芸能はその国の文化状況下でどのように独自の変遷をたどり、いまどのような位置づけがされているのだろう？東アジアの古典芸能の変容を、それぞれの国と地域の芸能の専門家が紹介する。

●東アジアの古典芸能のいま――1

現代に生きる中国古典芸能・秦腔（しんこう）の茶楼

1. China 中華人民共和国

清水拓野

中国の陝西・甘粛地方に、秦腔という古典芸能がある。少なくとも明代半ば（16世紀末）ごろから存在していたとされるこの古典芸能は、2006年に国定の無形文化遺産に認定され、中国政府の手厚い保護を受けるようになった。しかし、激動の中国現代史のなかで、秦腔の運命も翻弄され、上演形式や内容は幾多の変遷を経てきた。

民国期の秦腔役者は、識字率の低い下層階級に属し、その多くは村々を巡回公演して、簡素な移動式舞台で大衆受けする伝統演目を上演していた。1949年の中華人民共和国の建国以降は多くの劇団が国営化し、政治思想を伝達するために愛国的・啓蒙的な演目が上演されるようになった。1966年から10年続いた文化大革命時代は、毛沢東らによって伝統演目の上演が禁止される。1978年からの改革開放政策時代には伝統演目が復活するが、ライバルとなる娯楽の多様化によって衰退し、秦腔はしだいに関心を持たれなくなる。だが現在は、2006年に国定無形文化遺産化して以来、秦腔に対する人びとの保護意識は高まりつつある。

尚友秦腔茶楼の上演の様子

そうした中、現在、陝西省の省都・西安には、お茶を飲みながら秦腔が楽しめる秦腔茶楼（しんこうさろう）と呼ばれる場所がある。なかでも、尚友（しょうゆう）秦腔茶楼は、外国人や地方からの観客を相手に、ここ数年非常に活発に秦腔を上演している茶楼である。通常の劇団公演では、2時間がかりの長編伝統演目を延々と上演することが多いが、その茶楼では、陝西方言で歌われる秦腔が分らない観客に配慮して、演目の有名シーンだけを抜粋して上演する。また、木偶や皮影などの他の芸能も交互に上演し、観客に楽器演奏体験までさせて、飽きさせないようにしている。茶楼という上演形式は民国期にもあり、決して新しい存在ではない。しかし尚友秦腔茶楼のように、観光都市・西安という立地を活かして、外部の観客に合わせた上演形式・内容で運営されるのは、これまでの歴史を踏まえると大変興味深い。

Profile

しみず・たくや

関西国際大学国際コミュニケーション学部 准教授。専門は文化人類学、研究関心は文化遺産の継承・保護に関する研究など。